

通し番号	4303
------	------

分類番号	19-58-21-02
------	-------------

(成果情報名) 放牧牛を利用したヤマビル被害抑制技術の検討
[要約] ヤマビルの吸血被害の抑制技術を検討するため 50 a の耕作放棄地に和牛 2 頭を 87 日間放牧することで、放牧地内は周辺部よりヤマビルの個体数が少なく、また翌年にの生息数に影響する中・小ビルの割合も少なかった。
(実施機関・部名) 神奈川県畜産技術センター 企画経営部 連絡先 046-238-4056

[背景・ねらい]

近年、丹沢山周辺にヤマビルが大量発生して、吸血被害が広がっています。これは人手不足により十分に管理できず雑草が繁茂した「耕作放棄地」などの増加が、ヤマビルにとって生息しやすい、湿潤な環境となっていることが原因の 1 つと考えられます。

耕作放棄地へ放牧した牛による繁茂した雑草の採食によりヤマビルが生息しにくい環境をつくると同時に、ヤマビルを伝搬する野生動物の侵入を防止することにより減少させる。また、放牧時に塗布する殺ダニ剤についてその殺ヒル効果を検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 約 50a の耕作放棄地へ和牛(雌)2 頭を 6 月 5 日～8 月 30 日の 87 日間放牧することで雑草を減らす効果が認められた。
- 2 放牧地内のヤマビル個体数は、放牧地周辺部と比較すると少ない個体数で推移した。また、9 月(放牧後)の調査では、放牧地周辺部と比較すると中・小ビルの割合が少なかった(表 1、図 1)。
- 3 牛の不食エリアでのヤマビル個体数は、定点での個体数より少なく、放牧地内に点在する不食エリアにヤマビルが集中することはなかった(図 2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 ヤマビル駆除の目的での放牧にあたっては、地面が露出する程度の採食圧が係ることが望ましい。
- 2 牛が採食出来ない草本類を放牧終了後に草刈り機などで刈り払うと効果的であるが、借り倒して堆積したままだと、その下でヤマビルが繁殖、越冬する可能性があるため燃やすなどの処理が必要である。

[具体的データ]



図1 放牧前・後の（左:放牧開始時 右:放牧70日目）

表1 放牧地および周辺の大きさ別の生息数（頭/日）

		大ビル	中ビル	小ビル
6・7月	放牧地	2 (25.0%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)
	放牧地周辺	4 (50.0%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)
9月	放牧地	4 (14.3%)	5 (17.9%)	0 (0.0%)
	放牧地周辺	6 (21.4%)	10 (35.7%)	3 (10.7%)

※後吸盤径が3.5mm以上を大ビル、3.5mm未満～1.5mm以上を中ビル
1.5mm未満を小ビルという

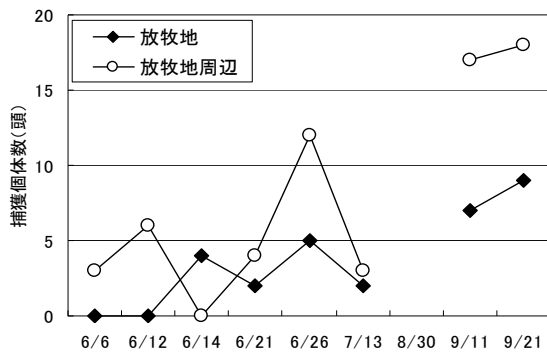


図1 放牧地と周辺のヤマビル個体数の推移

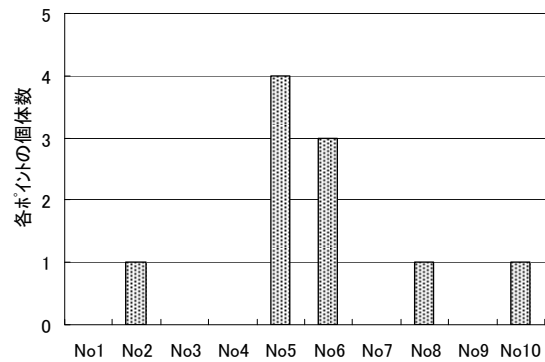


図2 不食エリアの個体数

[資料名] ヤマビル対策共同研究中間報告書

[研究課題名] 耕作放棄地におけるヤマビル防除に関する調査

[研究期間] 平成19～20年度

[研究者担当名] 前田卓也、堀 与志美、先崎 史人、折原 健太郎、林 幸江、引地 宏二